

〔書籍紹介〕

犬飼公之著

『アララギと万葉——正岡子規と扇畑忠雄論』

九里 順 子

本書は、長年にわたり古代和歌研究を牽引してきた著者が、正岡子規の「写生」「写実」論とそれに基づく『万葉集』の評価を検証し、『アララギ』（明41創刊）を継承する『群山』（昭21創刊）の編集責任者であった扇畑忠雄の詩歌観を検討することによって、子規の歌論とその水脈の意味を現代に問いかけたものである。

「一章 子規の歌論へ——歌よみに与ふる書」では、子規の、「文学」という新しい枠組みから伝統的な和歌・俳句という分類を捉え直そうとする視座に注目する。子規の発想は、常に理論と実作が連動しており、子規が俳句、続いて和歌の変革に向ったのも、小説家の断念、「新体詩」への傾斜、西洋心酔への反省という経緯がある。

子規の重要な用語である「写実」はリアリズムの訳語、「写生」はスケッチの訳語とそれぞれ文学と絵画に由来し、子規はそれらを使い分けつつ、「美の感情」を表出する方法としてふさわしい命名を模索していた。著者が

描く子規像は、明治という時代と個の必然とが出会う生き生きとした姿である。

「二章 子規の歌論と万葉」では、「一 古代和歌の風景」において「うたわれた風景」の意味を整理する。それは、土地の景観と記憶に立脚しつつ、歌人の想像力によって現出する「あるべき風景」である。即ち、主観的風景であると共に、現前的風景である。「二 子規の歌論と万葉・古今」では、「一」の整理を踏まえて子規の万葉観を検証していく。「感情を本」とすることは子規の文学観の基本であり、子規は万葉歌に「作者の感情」が表出されていることを高く評価する。これは、万葉歌の本質を掴んでいたと言えよう。更に、子規の『万葉集』評価は理屈に偏向した『古今集』との相対的比較の中で行われていることにも、著者は注目する。「美」の実体化の回避と同様に、子規の認識には常に柔軟な思考が働いているのである。「写生」「写実」という用語の使い分けは、最晩年の「病牀六尺」において「天然を写す」ことを打ち出して、両者が一致した地点に到達している。

「三章 扇畑忠雄の万葉研究」では、「学」（研究）と「芸」（歌作）の「交叉路」を「二つのまま包含」しつつ乗り越えようとした扇畑の研究の出発地点を確かめた上で、「主観」に立脚した抒情詩という万葉歌に対する氏

の基本的視座を捉える。原始美術の研究『はじめにイメージありき』（木村重信）が触媒となつて、「記憶のイメージ」としての自然（記紀歌謡）から「現実のイメージ」としての自然（万葉歌）、即ち「写象」から「写実」への転回が導き出され、「真の「写実」（リアリズム）」とは「在るもの」を基として「在らざるもの」を創造すること」という認識に到る。「終章 アララギと万葉」では、子規の「写生」を認識の原点に据えつつ、実作者としても「影の領域」をうたい込もうとしていた氏の姿を伝える。

著者は、他のジャンルから新しい認識の布置を貪欲に吸収し、古典のいのちを現代に環流させる子規と扇畑の軌跡が相似形であることを丹念に描く。それが、『アララギ』から『群山』へと継承された水脈の本質である。そこには、硬直した制度的思考を嫌い、歌の本質に迫ろうとし続ける著者自身の姿と願いも投影されている。（平成二十七年一〇月二〇日 おうふう刊 四一五頁 二八〇〇円＋税）